

『The Coming Storm』 演出ノート

世の中にあるひとつひとつの物語に魅了されながら、私たちはいつもその単調さにかなり欲求不満を感じている。例えば、「AによってBとなり、そしてCとなる」といった古い物語を楽しみながら、私たちはつねに、抗いがたく斬新な、そのアルファベットの順列を乱すような新しい物語を探している。いつもの様に、私たちは『The Coming Storm』を作るとき一つの物語を作るとを心に決めていた。にも関わらず、リハーサルでは、物語はただただ断片的な方向に進んでいった。完成されない物語、場面やイメージは、俳優が語ることで、互いに関連し合い、そして矛盾していく。

スタジオでの稽古を通して、ディスカッション、即興、ビデオ鑑賞、スランプ、ひらめき、そして議論を経る創造プロセスは、テキスト、音楽、アクションという作品の要素すべてを、参加者それぞれの対話、相互関係や作品の異なる要素のレイヤーへと落とし込まれていく。作品が本当の意味で“起こる”のは、その異なる場面の切り返しにおいてである。主に、即興を通じて作られたテキストは、ゆるく、簡単な言葉で、スタジオで話された当時のままである。しかし、作品の要素として私たちが作る物語の数々は、多様である。その物語の多くは未完成で、ほんの一部は信憑性があり、いくつかは個人的な物語として語られるが、その間に他の人たちは、とんでもなく不可能で複雑な映画のプロットのような話をしている。

もしも、この即自的で、自伝的で、不条理で、毎日の現実と同じように繰り返される、同時多発する体験の奇妙な空間を舞台でマッピングするとしたら、それは、ただやってみるしかないのである。

この作品において、私たちがもっとも興味をもったのは、未完成な物語が、常に観客によって完成される、もしくは観客によって想像的に補完されるということである。紡がれ、形づくられていく、たくさんの物語の中で（もしくは外で）、状況が創り上げられていく『The Coming Storm』は、いくつかの点で、私たちが長い間作ってきたものの中でもっともわかりにくい作品かもしれない。実際、この作品では、物語は断片的で、物語の調子、イメージや雰囲気は宙吊りにされたまま移り変わり、いつも物語はつながっているようで、バラバラに崩壊していく。一風変わった方法で私たちが創り上げたこの作品は、物語というよりもミュージカルに近いのかもしれない。その原理は、連想的で、詩的で、エネルギーにかつパターンをもって、矛盾しながらかつ繋がりをもって演じられることである。この作品で、私たちが期待するのは、生き生きとした何かをもつ作品——リスクを感じながら、いつも新鮮で、最先端の何かを感じる作品である。